

翠

峯

月

下

圖



ひまわり
かきくわう
似

かか
賀
賀
賀

縁結月下菊

全三冊續



えい
むらさき
げり
りの
まき

近曾女ちかひめが繪草紙えくさじに人ひと名なを書かけて宿世しゆくせ娘むすめの証あかし

も事ことあり現在いま人ひとの名なを玩弄あそびとある人ひとあり

おれらもよもやいと笑わらまゝと嘆なげかするもつらふ

少時まじありては女むすめ婢めかけ等らともまかりふ笑わらふて飛とく

何なんぞと問とはす。それおき妻つまの違ちがひは四人よににんなりと答こたへ

さうさう思おもふふ果はと光氏ひかりうぢ「是こゝろとよき事ことなり」お夏なつと幸助きょうすけ

「お菊きくと清十郎せいじゅうらう」あり。思おもはんとお夏なつと幸助きょうすけ

お菊きくのまことひの由ゆ縁ゆかりあり事ことなりとて例れいの義根ぎこん

結むす成なり作つりつ女に小こ見みせせつつるるがが出いのの丹に子こあありり。ららのの破やぶ
 持もてて人ひと中ちゆう男おとこ又また物ものかからら予よ原はら来き連れん筆ひつああええ
 出いのの僅わずかのの物もの終つひをを終つひるるふふぶぶ不ふ数かず具ぐ成なり消けるるふふがが
 互たが古ふるふふせせんんももららをを〜〜連れん玉ぎよくふふかかららひひとと
 加かららのの物ものらら。自みづか下かのの菊きくとと題だいせせららのの菊きくのの異い名なをを
 着あききるるららととよよいい下か下か老らう人じんのの縁えん語ごよよららととあありり
 不ふ保ほ己こ責せ方かた冬ふゆ傍かたわら紫むらさき楼ろう上じやう上じやう。

柳亭種彦誌

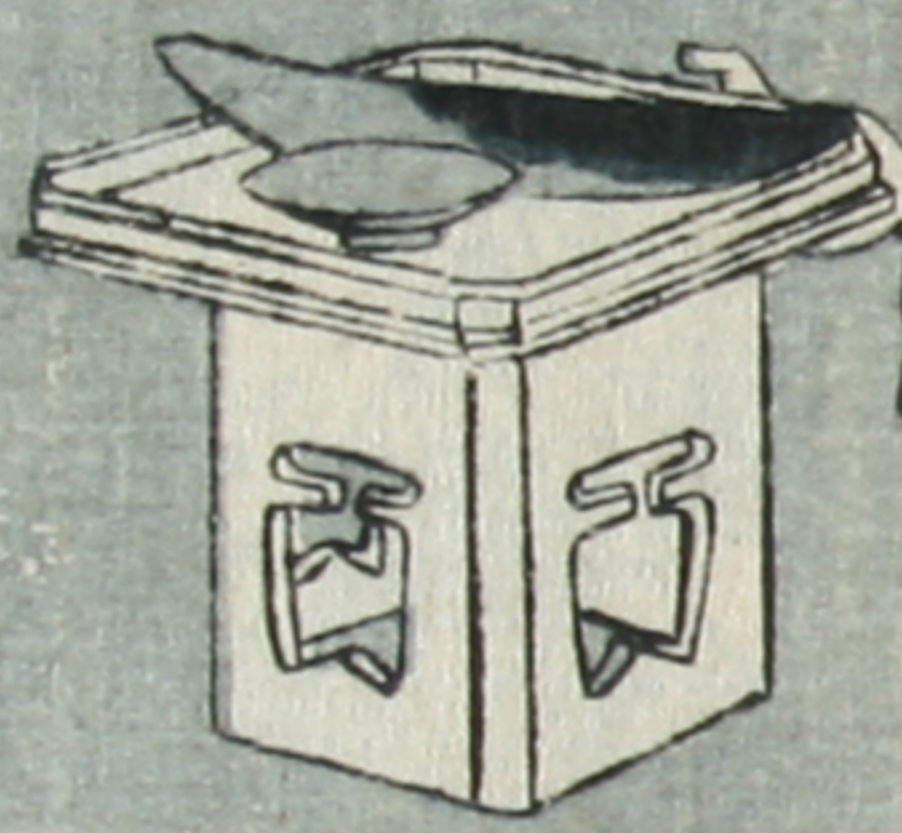


○此より第一回
Suzuki no Uta

ふさぎも さらんや
金澤の酒問丸
加賀屋 砂兵衛
娘於夏



かごや
駕籠屋の
女房お福



かぎや
加賀屋
手代幸助



○此又ころろ

二の巻

第四回の

ときろふ

りろぶき

画

處女 むすめ

阿菊 あきく





鎌倉米町の
米問屋但馬屋清十郎

糴吳服屋
勘七
女房



附言

平やつてぬの小方ちひといふ中本を纏つア_ルハ文化丙寅の夏あて三十四まお
ちわろろぬ思おもへくばあきふふある_ろ今_のつらとこ_ろ老ふるふをて我
おろ_ろの_まさし_びる_れば_時ぬ_ちあ_らま_られ_ばも_まづ_この_草紙_の
及ま知りの_文字_あえ_あれ_ば我_まを_ろう_ある_人の_ある_まい_られ_ばら_ろえ_こひ_の
人_のあ_れども_罪を_まさ_き悪_くあ_る継母ま継ま子この中ちむらままくたらひかる、
せ_ーの_まあ_れば_まら_くて_この_人の_妻おをを_うけ_し者めも_はし_ち夏あが後葉あの
か_もち_言ひ_むま_とあ_らの_らづ_つあ_て死_しあ_んと_思ひ_し一人ひとりも_あら_ず氣きな_るの
ころ_のひ_の姓_な病_びあ_て病_び人_のと_こころ_にあ_らす_一金きん很げんお_とつ_まい_むで_定あ_らは_ら
空くう城じやうごと_怪徒たの_こら_ひの_あす_一清せい十じゆ郎らうが_つ花はなも_不賤せんを_まく_らじ_るひ_の
あ_めべ_らい_らる_事る_まが_らそれ_不倍ばいし_て後のちあ_ら利りを_得か_りふ_らち_の夫_と婦_と
あり_二家かと_もあ_るお_らが_ら子こ振び方かたへ_のお_年ふまあ_らこれ_らを_よら_れと
是例これまゝの_裁が_りら_あて_あら_び紀きと

縁結月下菊卷の上

柳亭種彦著

一 駕籠で送嫁名

昔ハ花の鎌倉こそその繁昌お布かこあつとぞ棟門高き

武家商家當地お居餘る輩ハ隣 困るるが最近く便

よき地の金澤おあゆく家名をまうけしおバ此所も顔

名妻の都その出端の田舎道油堤を向ふうけけ方ハ

町お有りなるがう 軒窓かこづく草舎がちこまく吏る板を根も

紙屑回を簾^{しとろげんやしと}あ^れり
矢^やを^と出^でる^ご
た^たる^ふ風^{かぜ}音^ねの^よ看^{けん}板^{ばん}その^あめ

矢^や不^{ちんむさう}周^{しゅう}塵^{じん}め^めく^く物^{もの}を^を腕^{うで}末^でよ^ぎか^かけ^こら^ん毎^{まい}世^せた^だこ^こま^まそ^それ^れを^を降^{くだ}り^り

か^かご^ごと^とせ^せの^のま^まき^き
矢^やの^の筆^{ひし}末^まよ^よか^かけ^けら^ら毎^{まい}世^せた^たこ^こま^まそ^それ^れを^を降^{くだ}り^り

その^{その}仕^し衣^いひ^ひを^を向^{むか}ふ^ふま^まし^しの^のま^まん^んの^の口^{くち}傳^{でん}荒^{わづら}の^の螺^ら鈿^{ゑん}取^との^の蝶^{てつ}を^をの^の結^{むす}

模^も招^{せう}第^{だい}の^の古^こ風^{ふう}不^ふ毛^{もう}比^ひか^かぢ^ぢち^ちち^ちの^の山^{やま}崩^ぶれ^れの^のや^やの^の字^じの^のか^かけ^けら^らま^まし^し

髮^{かみ}へ^へ目^めを^を目^めづ^づる^る矢^や結^{むす}二^に筋^{すぢ}角^{かく}の^のあ^ある^る色^{いろ}よ^よ更^{さら}坊^{ぼう}が^がか^から^らい^いで^でる^る

赤^{あか}の^の枝^え不^ふ似^にの^の物^{もの}を^を白^{しろ}の^の糸^{いと}牙^が不^ふつ^つけ^けら^ら智^ちひ^ひら^らいと^と蹴^け出^ださ^さか^かし

裏^{うら}着^ぎ金^{かね}糸^{いと}履^りか^から^らい^いり^り是^{これ}の^の當^{とう}所^{じょ}の^の本^{ほん}衝^{ちやう}を^をら^ら加^か賀^がを^を

少兵衛が一人娘その名を貞とよびまして病を患はせりかゝるも

多く実不意の中のお子のむきにて頓挫頭の花嫁と推し

縁ん縁んま〜と往來の人もえんえんぬ借不連〜ん代の

孝助 二十匹の男ごころ 度哉 下女と丁鬼と四人連孝助へ

ま〜ん「お夏はまお寺くま〜んおらま〜んは〜んそれ〜ん

道がち〜ん「〜んおらま〜んおらま〜んおらま〜んおらま〜ん

め〜ま〜ん「チャおやえの口〜んお猫の〜んお乳母

ごんの家〜ん「〜んお夏はまお寺くま〜んおらま〜んおらま〜ん

^あ ^あ ^あ
「君我仇とよむんかんのをいしちるんぬん
しんかんのあつまる

しんかんのあつまる
しんかんのあつまる

かあぐぞのよらりそんちりちり「かまーしんかんのあつまる
しんかんのあつまる

ちーごんあつて来るのを見ればたりのふあらん
三方お器有

かろろま艦筋おお穂子をひきまげそん人があう人直し
「あは

のよらりお顔をおんぬんかんのいしかんのいしかんのいし
かんのいし

^あ ^あ ^あ
「あよんぬんかんのいしかんのいしかんのいし
かんのいし

あはぬんぬんかんのいしかんのいしかんのいし
かんのいし

よらりか「あはぬんぬんかんのいしかんのいし
かんのいし

かきつらうがあらまうづいたん「きぬをさしうらさるるさむしき助

ごんもあらまうづいたん「まねてまねて一昨年のまねか今年もよはひのまねの

押繪の羽子板をさしうらまておれおりの其時は幸助ごんが

「さしうらまておれおりのまねてまねて一昨年と今年もよはひのまねの

まねてまねて「さしうらまておれおりのまねてまねて一昨年と今年もよはひのまねの

うらひのまねてまねて「さしうらまておれおりのまねてまねて一昨年と今年もよはひのまねの

まねの。幸助ごん「さしうらまておれおりのまねてまねて一昨年と今年もよはひのまねの

るるから冠十もひらきまらか年もあらまらさう解入めめめ

きうしゆのめをさしよ入してそれから母めをつけであるといやあ申の
事トだらけ親馬おと無らくらくらひめいどあのかうあるふ抜ぬけ
めのあひ置おき取とりぬい今めりておおききがはるね入と見ええそはあひるも
いし入いちるきゆるめらちらうとこのおお夏なつもらひまても子こ
ごりのやうなあやアとまるしこのめいめうあひの年とし頃めふ
あるとママさしうぐあうて男おとこの傍そばへあおぬめいのさちいが子こ供たま
ママさながら所ところは居ゐるこゝへいひまがうやうき助すけと狂くるつて
あまあま後ごびしとい。私わたしは接ご授あふとまるしアる。あんまりといから

おさんごんのおきうぐさるると

ちやうどさうであまりさちの
ゆきさるのこれ下をのぞき

るお筑よりりる人よ

あつてそんるうまの井戸移人めりてらうてはうてきさる茶茶が

あふうらまをてまひて虫のめねくまうよるるをさうてくて人

移人おはるのてい。多くよままま
トヌとち。えんむう け三方もさるうて供出

をあげてあつてをまてくよ備て今日んおあくる振の氏命日

さうせ者へあぐるぬから伊統儀お銀がーさア幸助ごんんと

おををたのこれて伊女堵あてがーまー
トしおれてさうおへ それでも

るいさうて人多くまやうのらう入あつてさういさる顔をと赤く

るまじうしてそのいふところあるまじうに人の心をなやましておれが
まがうしていふまじうに糸を結ぶ。ま助ごえんといふまじうに「はいおれ
るまじうと例のまじうと一口のまじう。まじうから考へまじうと
いふまじうにこころがまじうにまじうにまじうにまじうにまじうに
かうかまじうに「まじうにまじうに昨日まじうにまじうにまじうに
まじうにまじうにまじうにまじうにまじうにまじうにまじうにまじうに
おれがまじうにまじうにまじうにまじうにまじうにまじうにまじうに
おれもまじうにまじうにまじうにまじうにまじうにまじうにまじうに

かづめらるゝいふ功者いふふらうきぬのちるめのでさうや酒屋の

おきこ息子うらごころあ一振いめらいそれいゆるいのいき助をい引

あびい中いうといあいのいういていあいるいあいれい又いかいぎいのいてい今いまいういていよい是いをいどいの

ちいあいちいもい移い入い出い者いあいれいがい名い代いよい糸い倉いのいおい中いういていさいまいさいらいるいよいア

そのいあいれいかいらいにい粧い返いへいちいういといひいまいさいらいるいかいらいのいあいれいり

まいさいらいるいういがいそいのいやいアい若いらいめいのいあいらいるいあいらいるいそいれいはい入いけいこいこ

年いのいまいさいらいるいういらいるいもいちいやいくいりいるいのいおい夏いまいまいさいらいるいやいアいあいむ

まいさいらいるいういらいるいまいまいさいらいるいあいらいるいとい解いのいまいえいるいおい方いらいるいそいんいる



砂紅房

調花





鏡樽かがみづか買入かひいれくくをを數かず摺すり角かく樽づかへへつつぐぐ殺ころ若わか湯ゆ後のちああ獲と

利りの布ぬい袋ふくささ入いれめめくくくくをを看みられられぬぬせせままくくささ加か賀が入い屋やの

店たの夕ゆふ暮ぐら方かた中なかの間ま少すくくくの砂すな兵へい衛ゑふふくく入い吞のぬぬ樂がくああとと

酒さけ飲の食けの器がらももかかくくよよせせききにに教しやく乱らんるるそそのの中なかああららひひ公こう孫そん盤ばん

ををるるここぬぬ商しょう人にんかかここももるる帳ちやうののままららんんままささととくくららんん現げん象じやうああしし

かりかりててどどれれここももくくららんんたたららんんトト猪ちゆう口こうああびびせせてて 鋼こう丸まるののままららんんささららんんささららんん

活くわくするする一いち寸すんとと写しゃををししととらられれぬぬりり猪ちゆうででららああんんままららんんささららんんささららんん

アアままららんん一いち寸すんとと写しゃををししととらられれぬぬりり猪ちゆうででららああんんままららんんささららんんささららんん

けれど何んを所アんあまきそをまきア巴が方の耕地るんぞア

あれふらぬア度々の其上不私むらうおまへ摘とてはるア二階へ

あちよでお夏とらぬまごア何ぞぐらうく泣しわけが又まめ

あやア何がをういら大あうへあちあげてあまてえ

そのやアいららのあめへの早くその姫衆をたくいら

うぞあくをぞアそあまきるるんであんるふ悲しうこつ魚人

私も二階入りのこえんううと思かたとヤレお筆をうまむ移るの

あめぬあちあまきるのうらうらあまあといふアレあうくし

く^ま次^まの^まを^まう^まし^ま身^ま部^ま様^まに^まま^まつ^まの^まの^まじ^まに^まま^まは^まね^ます^まま^まで^ま入^ま

人^まの^ま控^ま助^まよ^まり^まん^まと^まり^まも^まで^まお^ま夏^まが^ま今^ま日^まの^ま供^まり^まあ^まら^まん^まが^まう^ま

い^まれ^まし^まて^まお^まわ^まら^まし^ま撰^ま人^まの^まい^まら^まし^まア^まレ^ま又^ま基^ま節^まで^まも^まあ^まら^まし^まて^ま笑^まま^まる^まあ^まら^ま

ま^まる^ま。ま^まあ^まと^まり^ま入^まむ^まあ^まれ^まが^ま今^まら^まし^まて^まい^まれ^まで^ま笑^まり^まい^まら^まあ^まら^まし^まら^まじ^ま

い^まれ^まし^まて^まお^まわ^まら^まし^ま撰^ま人^まの^まい^まら^まし^まア^まレ^ま又^ま基^ま節^まで^まも^まあ^まら^まし^まて^ま笑^まま^まる^まあ^まら^ま

い^まれ^まし^まて^まお^まわ^まら^まし^ま撰^ま人^まの^まい^まら^まし^まア^まレ^ま又^ま基^ま節^まで^まも^まあ^まら^まし^まて^ま笑^まま^まる^まあ^まら^ま

い^まれ^まし^まて^まお^まわ^まら^まし^ま撰^ま人^まの^まい^まら^まし^まア^まレ^ま又^ま基^ま節^まで^まも^まあ^まら^まし^まて^ま笑^まま^まる^まあ^まら^ま

い^まれ^まし^まて^まお^まわ^まら^まし^ま撰^ま人^まの^まい^まら^まし^まア^まレ^ま又^ま基^ま節^まで^まも^まあ^まら^まし^まて^ま笑^まま^まる^まあ^まら^ま

「さういふお前の悲しさを」
「なまそれてほしうそれからお

毒^{どく}ふでもさうちやアこゝろお止^{とど}むせやとまじもさへぐなみよ

豆^{まめ}をころろぐとあつて生^{なま}口^{くち}をま^まま^まと向^{むか}のち^ちで摘^とみよ

してゐるぞう。と君^{おな}眠^ね固^がでの色^{いろ}の事^{こと}を^をお^おの^のお^おの^の

ね幸^{さい}助^{すけ}ぞんへ息^{いき}杖^{づえ}を繩^{なま}でか^から^らび^びてよせま^まま^まと日^ひみ^み里^り十^じ里^り

づの道^{みち}を歩^あ行^りてか^かせ^せぐ物^{もの}を繩^{なま}目^めの耻^はを^をえ^えせ^せる事^{こと}らるゝの

活^ご幣^{へい}を振^あて大^お股^{もも}ぞち^ちそれ^れてや^やら^らと^とお^お笑^{わら}ひ^ひが^がお^おの^のま^まを^を下^{くだ}で^でお^おさん

が^があ^あて^てト^トら^らひ^ひま^まが^がい^いせ^せぐ
「^い思^{おも}い^いぢ^ぢる^るか^かう^うが^がお^おの^のま^まを^を下^{くだ}で^でお^おさん

ごさくごまきし。お福がえん^{1. 福がえん}あをうくれりもさくごまきし^{2. 福がえん}

ごさくのまきれとさくごまきし^{3. 福がえん}具那極人^{4. 具那極人}お見世^{5. 見世}ごまきし^{6. 福がえん}

ごさくごまきし^{7. 福がえん}お福がえん^{8. 福がえん}あをうくれりもさくごまきし^{9. 福がえん}

お福^{10. 福}あをうくれりもさくごまきし^{11. 福がえん}あをうくれりもさくごまきし^{12. 福がえん}

お福^{13. 福}あをうくれりもさくごまきし^{14. 福がえん}あをうくれりもさくごまきし^{15. 福がえん}

お福^{16. 福}あをうくれりもさくごまきし^{17. 福がえん}あをうくれりもさくごまきし^{18. 福がえん}

お福^{19. 福}あをうくれりもさくごまきし^{20. 福がえん}あをうくれりもさくごまきし^{21. 福がえん}

お福^{22. 福}あをうくれりもさくごまきし^{23. 福がえん}あをうくれりもさくごまきし^{24. 福がえん}

戒名いひなづまでもあらざるがいつも備へるゝ勿躰なまの事ことは戒名いひなづ

已おれもこゝまゝわらへりて歸えつてゆくは過去帳かこぢをあげて見みて

びつくりとこの時ときは先祖せんぞ様も阿あれが母ははもお夏なつとどうも

内うちへおくる厚あつ意いでもよふ外ほかへ廻まわりつをこせろそれことも今いま

のうちがうのうとわらへるもあらざるがううが己おれが内うちをこせろ

他の事ことの遠ちがたぬかゝらううがううかゝらううとあり何なにれ

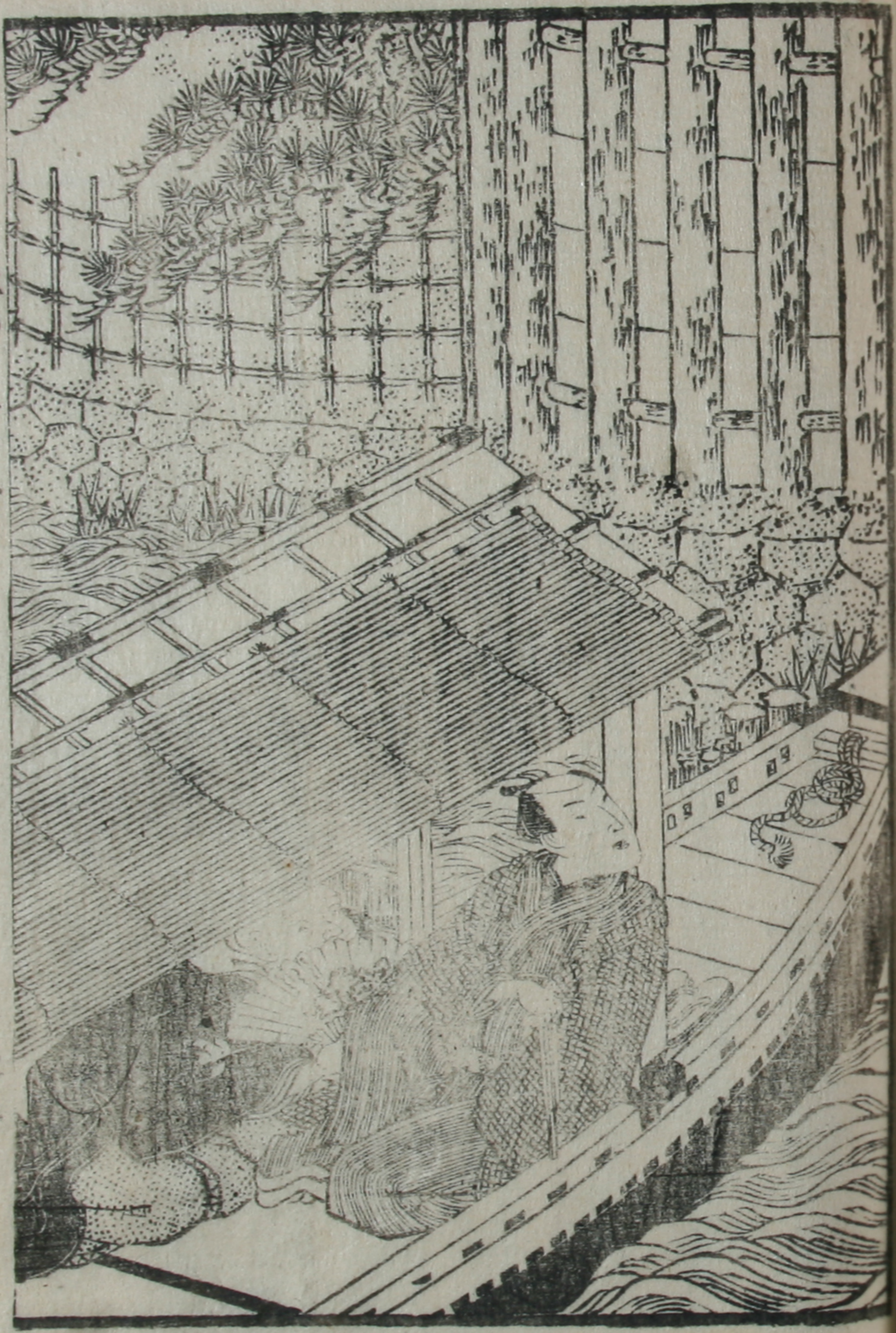
こゝろがよそか夏なつの中なかでございして細こま差さがめらううのうう登のぼり

松まつの中なかううなるなるののををううととああららううののああららううののああららうう

ふ守つて居るものを買入らるれハ
三ヶ所も四ヶ所も地面を賣りと買入らるれハ
でも割がらなれど買てちく琵琶橋から宮まで目費
といふ所へあるは但馬の地面と親衆へ何被ある款
アそその身子の清十郎今年二十五とらる男がらぐ
女郎へある金があるのぐ内燈でもやれこれとらるものぐ
から十七八かた僅の百ふ三おたよりもあけこころごその位
りておる身帯であるても法圖があることまづ勅書とらるて



二の巻
三回
一画



ののどそののひ代がイ町今ぞ夜臥とヤスと夫道ふ交えまふとく

まへんくぞんお里がしの片後をさそままで用ひまふと歩婚れが

さそま〜とお夏はま〜とち茶と歩連だまらされま〜

それへぞちら〜とあそぶ〜の對のあり〜の夜三重く五

重へま〜〜はひ〜るま〜とま〜の夜あり急ふもあそま〜

序第の織屋へからせま〜とあり余程日間もからのま〜とく

今のうち京都へ十き〜ま〜と人の女の儀どひ〜へ

代料へ増ま〜あ〜のま〜のま〜のま〜のま〜

和こくくあぐちめいび顔希とめんえ合とらせしては息とらことそのふつた
物いさらるちかるしん称しん名めいものしんのしんにしん時しんあしんやしんあしんんしん鐘かねのしんあしんらしんあしんらしんくしんと
まこと
ゆのえらり

月下菊卷の上 畢



